

## 古ウイグル語文献中のyiti/sakiz tistaki boz「七/ 八齒棉布」について

田先, 千春  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494679>

---

出版情報：比較社会文化研究. 24, pp.105-112, 2008-09-30. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：

# 古ウイグル語文献中の yiti/säkiz tištäki böz 「七/八齒棉布」について

タ サキ チ ハル  
 田 先 千 春

## 0. はじめに

### — yiti/säkiz tištäki böz と先行研究 —

9世紀以降東部天山地方を本拠地とした西ウイグル王国では、棉布が通貨として流通し社会・経済的に重要な役割を担っていた。これに関して貴重な情報をもたらしているのが、20世紀以降に主としてトゥルファンから将来された古ウイグル語文献（以下ウイグル文書とする）である。およそ9-14世紀に年代付けられるこれらの文書には各種の棉布が頻々と登場し、その重要性を物語って興味深い。yiti/säkiz tištäki bözはそのひとつであるが、いくつかの議論はあるもののその実態は不明である。この小文では若干の新たな情報を加え、問題点の整理・再検討を行なう。様々な種類が流通しながらも不明の点が多いトゥルファンの棉布に対する理解の一助となることを期待するものである。

yiti/säkiz tištäki bözは文字通りには「7~8の(=yiti/säkiz) 齒にある(=tištäki) 棉布(=böz)」という意味になる。従来、棉布の一種という認識にとどまっていたこの yiti/säkiz tištäki böz について、より具体的な考察に踏み込んだのは S.Ch.ラシュマン氏であった[Raschmann 1995: 37-38]。氏は tiš(齒)を織機の部品の一つである箴の「齒」であると解釈して、tištäkiという術語は箴齒の密度を示すものであり、棉布の品質(=密度)ないしは織幅の指標であるとした。

ついで松井太氏は、敦煌出土の漢文文献に現れる「七綜布、捌綜縹」等の表現との対応関係に着目し、ウイグル語の yiti/säkiz tištäki böz はこれらの漢語の透写であると指摘した[Matsui 2006: 45-47]。当時トゥルファン・敦煌の物資の往来は繁く棉布の流通圏としても重なっていたので、両術語が同一品目を指すことは疑いない。松井氏が漢語「綜」が織機の'heddle'を意味することから、これらが何らかの織技にかかわる術語であろうとしている。

両氏によって yiti/säkiz tištäki böz という術語が U6112+U6163+U6166+U6201 verso, SI O.2, Ot.Ry.1415 といった文書に在証されることが既に確認されているが、いずれも物品の授受に関わる目録・書付の類であり、この

種の棉布が、①特定の種類のものでも他の種の棉布とは区別されていたこと、②支出入の際に一種の通貨として機能しており、一定の品質・規格が保持されたものであったろうこと、といった点がせいぜい知られるのみである。残念ながらその本質的な実態に関して、両氏の議論以上の情報をこれらの文献から得ることは困難である。そこで本稿では、文献に加えて考古資料も用いることで yiti/säkiz tištäki böz の実態について別の角度からの検討を試みる。

## 1. 漢文文献中の「(数字)+綜+織物名」

松井氏の指摘する「七綜布、捌綜縹」といった漢語表現は、敦煌文書のみならずトゥルファン出土の漢文文書(以下、吐魯番文書とする)にもその類型を見ることができる。一覧にすれば【表1】のごとくである<sup>1)</sup>。トゥルファンの「縦」と敦煌の「綜」という違いはあるものの、後述するとおり音は通じていたと考えられるため、両者は一連のものとして間違いないであろう。

【表1】出土漢文文書に現れる「(数字)+綜/縦+織物名」の例

	疊、縹(棉)	布(麻)	褐(毛)
吐魯番文書	六縦疊 七縦疊	八縦布	
敦煌文書	捌綜縹	七綜布 七綜半布 八綜布 九綜布 十綜布	褐七綜 八綜褐 白褐九綜 十綜(昌)褐 十二綜細褐

\*吐魯番文書は「吐魯番」、敦煌文書は「釈録」から抽出。

また、日野開三郎氏は新羅の貢獻品目中に「綜布、總布」(綜、總は通ずる)があることを指摘している[日野1972: 107-109]。『冊府元龜』(巻970 外臣部 朝貢三)は永徽四(653)年十一月に「新羅遣使獻金總布」という記事を載せ、『唐会要』(巻95 新羅の項)も天寶七(748)載に「六十總布」が献じられたことを伝える<sup>2)</sup>。このほか、新羅以外からの朝貢品として『冊府元龜』(巻970 外臣部 朝貢三)には(天寶七載)三月、黒水靺鞨黄頭室韋和解室韋如者室

韋路丹室韋、並遣使獻金銀及六十綜布魚牙紬朝霞紬牛  
黃頭髮人參。

という例もある。

字義として「綜」には箴あるいは綜統といった織機の部品の意味があるが、「縦」には織物に関連する意味を見出すことはできない。また、「總布」単独では「斗斛權衡の税、一説に行商者の税」という意味が指摘されているが〔大漢和8：1164〕、上に挙げた例にこれを直接適用することは難しかろう。これらの織物の実態について言及したものとしては管見の限りでは、敦煌文書の十二綜昌褐、十綜昌褐について「文綜統を使って毛の経糸緯糸で織った綾」とするセの説〔セ2003：143〕、吐魯番文書の例について「六縦疊・七縦疊・八縦布とは経緯の糸数の違いによる区別をいったもの」とする王氏の説〔王2005：40〕があるが、いずれも特に明確な根拠は挙げられていない。しかし吐魯番文書の録文中で編者が「八縦布」を「八縷布」と読み替えている点は注目に値する〔吐魯番1：12〕。というのも、『史記』卷11孝景本紀に「七縷布」なるものが現れ、索隠ならびに正義に次のように説明されている事実があるからである。

…令徒隸衣七縷布。〔索隠〕七縷、蓋今七升布。言其粗、故令衣之也。〔正義〕…縷、八十縷也。與布相似、七升布、用五百六十縷。

これによると、奴隸に着用させたという七縷布について索隠は「七縷とは、今の七升布のことである。（織りが）粗いことを言っており、それ故にこれを（奴隸に）着せたのである」といい、正義では「縷とは糸80本のことである。布と似ているが、七升布は560本（の糸）を用いる」と説明している。すなわち「縷」「升」とは麻布を織る際に用いる80本を1単位とする糸の束を指す。織りに際して数が問題となるのは緯糸ではなく経糸であるから、より正確に説明すれば、「縷」とは80本1単位とする経糸束のことであり、「（数字）+縷布」であれば80本の経糸を任意の倍数だけ取り揃えて織った布と理解できるのである。

さらに、『漢書』卷99中 王莽伝69中には「（天鳳三（16）年）…自公卿以下、一月之禄十縷布二匹、或帛一匹。」という記述も見え、当時十縷布が禄に当てられたこと、帛（絹布）の二分の一の価値であったことが知られ、注目に値する。

縷布が登場する史料は現時点ではこの2件のほかは見当たらないが、上記『史記』索隠に縷布の同義語と指摘されている「升布」は漢籍に複数の用例がある<sup>3</sup>。そのほとんどが服制で喪服に使用すべき布として言及される。例えば、『通典』礼には三升から三十升（三、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十五、三十）の布が見られる。これらの升数は出土文書中の綜布・縦布等にかかる数を全て含んでおり、両者が対応関係にあることを充分窺わせる。

ただし、この升布の用例は唐代に及んでいるものの、実質上は礼における古典に基づいた用法に限られているのに対し、出土文書中の綜布・縦布（以下綜布に統一する）の類は必ずしもそうではない。例えば八、十綜布は七條袈裟、九綜布は裙衫として用いられているし〔釈録3：64,67,69,72,79〕、七、八綜布等は布施として納められており〔釈録3：55,66〕、土地貸借の対価として絹布とともに八綜縷を受け取った例や〔釈録2：26〕、寺院に納められた物品に六縦疊・七縦疊が含まれるものもある〔吐魯番4：193〕。このような例は、敦煌文書・吐魯番文書中の綜布が消費物資であるとともに通貨に準ずる働きをしていたこともよく示している。

これは、やや時代は下るが高麗では綜布が通貨であった例と比較できるかもしれない。高麗の貨幣では銭貨と並行して麤布という麻布が用いられ、「五綜布、五升布」とも呼ばれていたが、納税にも用いられて使用価値・交換価値が保証されていたという〔須川1993：40〕。これは1升=80本の経糸5束分で織られたもので、高麗の綜布がまさしく中国の升布・縷布の流れを汲むものであることを物語っている。高麗における五綜布の語の初見は忠恵王元（1331）年とされるが〔須川1999：87〕、上掲の新羅の朝貢品目からすれば、朝鮮半島における綜布の生産がさらに遡ることは間違いない。ここから、升布や縷布が次第に中国本土以外の東西の地でも綜布・縷布・縦布などと表記されて流布していったこと、また服制上の用途に必ずしも限定されずしばしば通貨的役割を担っていた状況などを推測することが可能である。

なお、綜布・縦布と縷布が同一のものを指していたことは音の上からも確認できる。「縷」「縦」「綜」の現代音はいずれも〔zong〕であるが、中古音では縷=〔tsung〕、縦=〔tsiwong/tsung〕、綜=〔tsuong〕となる〔Karlgren：1177e,1191h,1003fを参照〕。敦煌文書に見られる「綜」については河西方言では〔tsuŋ〕とされるので〔高田1988：414〕、三者の音は互に通じていたと考えてよからう。

以上の議論に基づき、出土漢文書中の六〜十二綜の織物はそれぞれ480本（=80×6）から960本（=80×12）といった数の経糸を使用した布（麻）であり褐（毛）であり、そして縷・疊（棉）であったと結論づけたい。しかしこれが具体的に織物のどのような特徴に結びつくのかは実際のところ不明である。そもそも織物に使用する経糸数（=綜数）は織物の幅と糸密度とのいずれにも作用するもので、織幅を一定させれば経糸数は密度に作用する要素となり、密度設定を一定させるならば経糸数は織幅に作用する要素となる。『史記』の七縷布が「粗」とされ高麗の五綜布が麤布と呼ばれる点からすれば、これらは細粗に関わると考えられるが、一方でもし七、八、九綜といった1綜きぎみの経

糸数の差が織物に識別しうる差を与えるとすれば問題は密度よりも織幅となるかもしれない。いずれにせよこれは糸の太さや使用する織機の条件も深く関わる問題であり、現在の資料状況から判断を下すのは難しい。

そこでこのような織物の具体像の追求はいったん保留して、次項では「綜縹」が当時のトゥルファン・敦煌地域の棉布全体の中でどのような位置づけにあったのかという問題に目を転じ、出土棉布のデータに基づき使用糸数の観点から検討を加える。

## 2. 使用糸数からみた出土棉布の傾向と「綜縹」

出土棉布の使用糸数を算出するには糸密度と織幅の両データが必要であるが、幸運にも織幅を保持した資料がトゥルファン出土の寺幡に3点残され、うち2点は糸密度が公表されている。ベルリンのインド美術館（現ベルリン国立アジア美術館）所蔵のⅢ4432（Aとする）とⅢ6833（Bとする）である。両者の推定糸数を算出し（糸密度×織幅）、さらにそれを綜数に換算（推定糸数÷80、小数点以下四捨五入）したものが【表2】である。Aはおよそ6-8綜、Bは9-11綜に相当し、上掲の出土文書の各種織物に冠された綜数と一致している。漢籍に見える「1縹=1升=80本の糸」との説明は出土棉布に適用して差し支えない現実的数字であることが、このことから確かめられたといつてよい。

【表2】出土棉布の織幅・糸密度と綜数

資料番号	年代	織幅 (cm)	糸密度 (本/cm)	糸数 (本)	綜数換算
A Ⅲ4432	10世紀末-11世紀	50	10-12	500-600	6-8
B Ⅲ6833	11-12世紀	50.0 -51.0	15-17	750-867	9-11
参考 Ⅲ4782	10-11世紀	48	—	—	—

\* [Bhattacharya-Haesner 2003 : 493, 496] に基づく。

続いて、出土棉布の使用糸数を公表された糸密度データを用いて求め、比較の便宜上綜数に換算することとする。この作業によって出土棉布全体の糸使用数（=綜数）の傾向を把握し、その中での「綜縹」の位置づけを知ることができよう。まず棉布の織幅を50cmと仮定して<sup>5</sup>糸密度がどの綜数に相当するかを算出（糸密度×50÷80、小数点以下は四捨五入）すると、糸密度が9、10本（/cm）の資料は6綜に相当、同様に11本=7綜、12、13本=8綜、14、15本=9綜、16本=10綜、17、18本=11綜、19本=12綜と

いったおおよその目安が得られる。これに基づいてトゥルファン・敦煌出土棉布の糸密度とそれに対応する推定綜数を一覧にしたものが【表3】である<sup>6</sup>。

【表3】トゥルファン・敦煌出土棉布の糸データ

	資料番号	糸密度 (/cm)	推定綜数	年代
1	Ⅲ533	17-19	11-12	10世紀末-11世紀
2	Ⅲ4432	10-12	6-8	10世紀末-11世紀
3	Ⅲ4524	17-18	11	10世紀末-11世紀
4	Ⅲ6242	10-11	6-7	10世紀末-11世紀
5	Ⅲ6283	7-10	4-6	10世紀頃
6	Ⅲ6286	9	6	10世紀頃
7	Ⅲ6833	15-17	9-11	10世紀末-11世紀
8	Ⅲ7307	11	7	13-14世紀
9	Ⅲ7309	14-15	9	13-14世紀
10	B43 : 18	13	8	初唐-西夏・元
11	B43 : 24	26	16	初唐-西夏・元
12	B43 : 16	26	16	初唐-西夏・元
13	B46 : 1	10	6	-元
14	B47 : 38	13	8	8世紀-西夏・元
15	B48 : 11	11	7	初唐-(元?)
16	B49 : 16	11	7	初唐-西夏・元
17	B49 : 14	23	14	初唐-西夏・元
18	B49 : 2	24	15	初唐-西夏・元
19	B52(乙):13	11	7	-西夏・元
20	B52(乙):38	14	9	-西夏・元
21	B53 : 7	15	9	唐-13世紀末
22	B59 : 56	18	11	西魏-元
23	B61 : 1	12	8	?
24	B62 : 4	16	10	?
25	B63 : 3	24	15	?
26	B63 : 5	10	6	?
27	B64 : 3	10	6	?
28	B113 : 61	8-10	5-6	北朝-西夏
29	B115 : 6	8-10	5-6	?
30	B118 : 11	17	11	晚唐-
31	B119 : 5	10	6	晚唐-元
32	B159 : 21	37	23	-元
33	B184 : 7	8(x2)	10	-西夏・元
34	B222 : 6	11	7	隋末・唐初-
35	B228 : 17	9	6	隋末-唐初

\* トゥルファン資料（表中番号1-9）は [Bhattacharya-Haesner 2003 : 493-496]、敦煌資料（表中番号10-35）は【北区】1-3巻から抽出。

さて、敦煌文書において布や褐が七-十あるいは七-十二綜と幅広い綜数を示すのに対し縹は八綜のみで、時代的に遼吐魯番文書を含めても六-八綜という綜数しか確認

できない点はひとつの特徴であろう。もちろんこのような違いが史料残存の偶然性に左右される可能性は否定できないものの、ウイグル文書でこれに対応する yiti/säkiz tištäki böz においても現時点では7と8に限られるという状況は、この種の「綜縹」では6-8綜が主であったことを暗示する。そこで出土文書中の綜数表示を①「疊、縹」に冠される綜数(6-8)、②①以外で他の織物に冠される綜数(9-12)、③文書に在証例のない綜数、と3群に分けて、これに相当する出土棉布の事例数とその割合を【表4】にまとめてみた(なお【表3】該当箇所では網掛けし①から③へと色を薄くしている)。

【表4】出土棉布の推定綜数とその事例数

綜数	トゥルファン資料	敦煌資料	合計
① -8	5 (56%)	14 (54%)	19 (54%)
② 9-12	4 (44%)	6 (23%)	10 (29%)
③ 13-	0 (0%)	6 (23%)	6 (17%)
合計	9 (100%)	26 (100%)	25 (100%)

まず注目されるのは、①群の資料が全体の過半数に達している点である。また、②群がトゥルファン資料では残り44%を占め、敦煌資料では②群23%に加えさらに大きい綜数を示す③群が23%存在する点も興味深い。これはトゥルファン資料が寺幡という画布に限定されるのに対し、敦煌資料は衣服や袋の断片が含まれるという用途の差が反映されたものであろう。文書に示された綜数より少ない資料は基本的に存在しない。

以上を踏まえると、綜数6-8の棉布は経糸数から見る限りでは上等品とは言い難い。これより経糸数の多いものはあっても少ないものはないからである。ただし、その割合が全体の過半数を占める点はこれが殊更な粗悪品ではなく、むしろ並の「普及品」であることを意味する。その一方で文書における「六一八綜縹、yiti/säkiz tištäki böz」の在証例は他の棉布の例に比較して決して多いとはいえ少数派である。このことは、ふたつの可能性を示唆する。ひとつは六一八綜縹が品質的には大多数の並の棉布と同水準であったが使用経糸数が特別に明示・保証されることで他とは一線を画していた場合。もうひとつは、朝鮮半島の通貨に見られる如く<sup>7)</sup>、この種の棉布が規格として長幅に加え経糸数も6-8綜と規定されていたものの、その普及性の高さゆえに通常は単に「縹、böz」とだけ呼ばれていたが、何らかの理由で時として綜数表示を伴う名称で呼ばれた場合。ただし、後者のように経糸数までを指定する厳密な規格設定は貨幣等かなり高次元での公認価値を付加されたもの以外を想定するのは難しく、西ウイグル王国には

quanpu と呼ばれる通貨棉布が既に存在する事実に鑑みれば六一八綜縹がこれに相当する可能性は低い。実際、Ot. Ry.1415では yiti/säkiz tištäki böz のほか quanpu、qoço bözi、inčgä boz 「官布、高昌棉布(安西縹)、細棉布(細縹)」という3種の棉布が並列して現れることから、yiti/säkiz tištäki böz は「公認貨幣ではなく、細密な品質でもない」普及品であるが使用経糸数が保証された棉布であったと考えるのが最も妥当ではなかろうか。その意味では、前出の密度か織幅かという議論も二者択一の問題と考えるのではなく、(もちろん暗黙に了解されたおよその細粗と幅はあったろうが) 純粋な使用経糸数の表示以下でも以上でもなかったと理解すべきかもしれない。

### 3. 漢語「綜」とウイグル語 'tištäki(齒にある)'

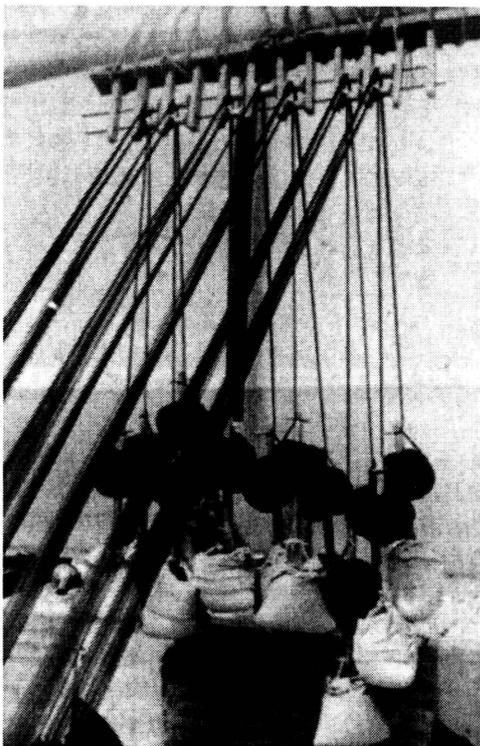
最後に漢語の「(数字)+綜縹」という表現は、果たしてウイグル語の yiti/säkiz tištäki böz とどのように対応するのか、という問題を取り上げたい。両者は対応関係にあるとはいえ、その間には一より特定すれば「綜」と'tištäki(齒にある)'という語の間には一語義上の対応関係が全くなく、この種の棉布に対するウイグル語名の由来は不明である。資料の不在により現状でこの問題を解決することは極めて難しいと言わざるを得ない。以下では近現代の中央アジアの織技を参考にして、ひとつの仮定を提示するにとどめたい。

綜が80本の経糸束を意味することは繰り返し述べたとおりである。これは古典に遡って漢文化圏に属する織成概念である。前出のとおり4世紀の吐魯番文書に「八縦布」という語が現れるという事実は、この布が現地産か否かは別としても、少なくとも漢文化圏の綜の概念がトゥルファンに達していたことを示す。7世紀になると同じく吐魯番文書に「六縦疊」「七縦疊」が登場する。棉が当時の中国内地に産しない以上、これは当地産と考えるべきで、この時点で中国本土の綜(=経糸束)という概念がトゥルファン在来の棉繊維紡織技術と何らかの形で融合されていたことは明らかである。長繊維を績んだ麻糸と短繊維を紡いだ棉糸という素材の違いがある以上、漢式織技をそのまま移転させるには困難が伴うことは容易に想像でき、現地に根付いた棉紡織の技術が無視されたとは考え難い。加えて、この7世紀という時期のトゥルファンでは麴氏高昌国が唐の支配下に入りその制度が持ち込まれている。税制もそのひとつで、棉布が税として徴収されたこと、麴氏高昌国から唐の直隸州への交代がトゥルファンの織物生産の様相を変えていったことが既に指摘されている [池田1982:76、荒川1994:115]。もちろん徴収された棉布が綜縹であったという記述はないが、少なくともこの時期のトゥルファンでは、

唐支配下に入ったことがひとつの推進力となって、徴税対象として長年麻布・絹布を織ってきた中国本土の効率的な織機・織技がもたらされ棉布生産の現場に導入されるなど、何らかの技術革新が行なわれたとしても不思議はない。六(七)縦疊をこの文脈において見ることは可能であろう。

言うまでもなくこの六(七)縦疊は後の yiti/säkiz tištäki böz に連なるものであり、7世紀に生まれたトゥルファンの棉糸で漢式の織物を織るための融合技術は数世紀にわたって継承されたことになる。この織技の中に、綜(=経糸束)を tiš (=齒) と呼ばしめる何かがあったと推測できようが、それは何であったのか。

トゥルファンを含む中央アジア一帯の織機の研究報告をつぶさに眺めると[吉本&柳2002、ヴルフ2001]、経糸束を備えた独特の織機の伝統が今日まで残っていることが知られる。なかでも興味深いのは、「経糸の吊し枠」と呼ばれる織機の部品である。これはちょうど幅の狭い梯子を横に寝かせた形で織機後方の上部に設置され、複数の枠のひとつひとつに経糸束が通される【図1】。これと類似の機能を持つ部品はイランやインドそして新疆などの伝統的織機に確認でき、現代ウイグル語では'tamaq'という名称で呼ばれている。



【図1】イランの経糸垂下式織機の経糸吊し枠  
[ヴルフ2001: 210] より引用

ここで yiti/säkiz tištäki böz の tiš という語の持つ意味を想起されたい。実はこの語には本来の 'tooth (齒)' という意味のほかに、'plough-share (鋤の刃)', 'the iron piece which farmers put on a wooden plough (農民が木製の鋤

に取り付ける鉄の部品)' [ED: 557] という意味も含まれている。この場合の鋤の候補として最もふさわしいのは、西アジア～中央アジアで広く使用されてきた「齒つき馬鋤」と呼ばれる種類のものであろう【図2】。齒つき馬鋤のイラ



【図2】齒つき馬鋤 (イラン・コルディスタン地方)  
[ヴルフ2001: 271] より

ンでの使用例を報告しているヴルフ氏は、それが「12世紀の中国の農書にある木版画の挿絵とまったく同じ形をしている」ということも併せて紹介しているが[ヴルフ2001: 271-272]、確かに南宋の楼璣『耕織図』や元代の王禎『農書』に「鈔」として掲載される鋤の図とほとんど違うところがない。この事実ならびに、そもそも tiš に「鋤の刃」の意があることを伝えているのが11世紀のカーシュガリー『チュルク語辞典』[CTD2: 212, no.497]であるという点を考え合わせると、この種の鋤がウイグル文書の時代のトゥルファンにおいても使用されていたと考えてまず問題ない。

本論にとって重要なのは、この齒つき馬鋤と上述の経糸の吊し枠の形状が極めて類似している点である。織機の部品が、その外見上の類似から日常親しんだ農具を連想させ、同様の名称で呼ばれたことは十分に有り得ることである。事実、現代ウイグル語で経糸の吊し枠を意味する'tamaq'は同時に「馬鋤」の意味も併せ持ち<sup>8</sup>、その齒は'chish (齒)' と呼ばれる。筆者が訪ねた織物工房では<sup>9</sup>、「tamaq に12枠 (=齒) 分の経糸束を通して織成しているが、枠が増えれば織幅は広くなるし、減れば織幅は狭くなる」という説明を受けた。枠数すなわち齒の数でもって経糸束の数を把握していると理解できよう。

このような事実は、西ウイグル時代の tištäki という語が漢語の綜といかにして対応するに至ったのかを示唆するひとつの重要なヒントとなるかもしれない。すなわち yiti/säkiz tištäki böz を「7～8の齒において(整えられた経糸束によって織られたところの)棉布」と解することが可能となるのである。

## 4. おわりに

本稿ではウイグル文書中の yiti/säkiz tištäki böz という棉布をまず漢文文献との関係から検討し、対応関係にある「(数字)+綜」を冠した織物が80本を1束とする経糸を任意の数用いて織ったものであると結論付けた。これは対応する時代・地域の出土棉布のデータとも合致する。また、出土棉布を経糸数に着目して分析することにより、問題の棉布が使用経糸数の保証された普及品の一種であった可能性を指摘した。最後に、上記の漢語とウイグル語が字義上は対応しないものの、近現代の中央アジアの織技を参照し、経糸束にかかわる織機の部品「経糸の吊し杵」を介すれば両者がともに経糸束に関わるという共通点を取り出すことができるのではないかと提案した。

本稿で用いたデータは不完全な部分も多いため、より正確な結論を得るためには今後の実見調査による補完や訂正の必要がある。今後の課題としたい。

## 5. 参考文献

- 荒川正晴 1994「書評：山田信夫著、小田壽典・P. Zieme・梅村坦・森安孝夫編『ウイグル文契約文書集成』I、II、III」『史学雑誌』103-8、pp.109-119.
- Bhattacharya-Haesner, Chhaya, 2003 *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum fürIndische Kunst*, Berlin, DietrichReimer Verlag, Berlin, 496pp.
- CTD : R. Dankoff, R. & Kelly, J. 1982-1985 Mahmud al-Kasryari. *Compendium of the Turkic Dialects (Diwan Luyat at-Turk)*, 3vols, Harvard University.
- 大漢和 : 諸橋轍二『大漢和辞典』12巻、大修館書店。
- ED : Clauson, G. 1972 *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth-century Turkish*, Oxford, Clarendon Press.
- 日野開三郎1972「国際交流史上より見た満鮮の絹織物(二) - 新羅大統一時代 -」『新鮮学報』63, pp.97-127.
- 北区 : 彭金章 他(編) 2000『敦煌莫高窟北区石窟』1-3巻、文物出版社。
- 維漢大詞典 : 新疆维吾尔自治区语言文字工作委员会(編著) 2006『維漢大詞典』、北京、民族出版社。
- 池田温 1982「中国における吐魯番文書整理研究の進展 - 唐長孺教授講演の紹介を中心に -」『史学雑誌』91-3、pp.59-85.
- Karlgren, B. 1966 *Grammata serica : script and phonetics in Chinese and Sino-Japanese*, Taipei.
- 松井太 1997「書評：S.-Ch. Raschmann, *Baumwolle im türkischen Zentralasien*, Wiesbaden 1995」、『内陸アジア言語の研究』Ⅷ、pp.99-116.
- Matsui, Dai 2006 Six Uigur Contracts from the West Uigur Period (10th-12th Centuries), *Studies in the Humanities* 15, Hirosaki, pp.35-60.
- セ小紅 2003『唐五代宋初敦煌畜牧業研究』(敦煌叢刊二集16)、台北、新文豊出版公司。
- 王艷明 2005「晋唐時期吐魯番的植棉和棉紡織業」『敦煌研究』2005-1、pp.37-44.
- Raschmann, S.-Ch. 1995 *Baumwolle im türkischen Zentralasien: Philologische und wirtschaftshistorische Untersuchungen anhand der vorislamischen uigurischen Texte. (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Vol.44)* Wiesbaden, Harrasowitz Verlag.
- 釈録 : 唐耕耦・陸宏基編1986-1990『敦煌社会經濟文獻真蹟積録』5輯、全国図書館文獻縮微複製中心・古佚小説会。
- 須川英徳 1993「高麗から李朝初期における諸貨幣一銭・銀・楮貨」『歴史評論』516、pp.38-51.
- 1999「朝鮮時代の貨幣一「利権在上」をめぐる葛藤一」『越境する貨幣』、青木書店、pp.75-108.
- 高田時雄 1988『敦煌資料による中国語史の研究一九・十世紀の河西方言一』、創文社。
- 吐魯番 : 国家文物局古文献研究室・新疆维吾尔自治区博物館・武漢大学歴史系(編) 1981-1990『吐魯番出土文書』10巻、文物出版社。
- ヴルフ、ハンス・E 2001『ペルシアの伝統技術一風土・歴史・職人』平凡社、432pp.
- 吉本忍&柳悦州 2002「シルクロードの織機の織機」『シルクロード織機研究』、シルクロード学術研究センター、奈良、pp.163-287.

## 注

- 1 吐魯番文書の疊は72TAM151 : 102, 103 (7c 前半) [4 : 193] ; 布は59TAM305 : 14/2 (4c 末) [1 : 12]、64TAM34 : 11 (7c 初) [3 : 6]、72TAM151 : 102, 103 (7c 前半) [4 : 193]。敦煌文書の縷は P.3155v (904年) [2 : 26]、P.5588(2) (年代不明) [3 : 247] ; 布は P.3774 (821年) [2 : 285]、P.2912 (年代不明) [3 : 55]、P.2583 (年代不明) [3 : 64-70]、P.2567v (793年) [3 : 72]、P.3541 (年代不明) [3 : 79]、北図372 : 8462v (年代不明) [3 : 110] ; 褐は S.6417v (10世紀前半) [2 : 299]、北図372 : 8462v (年代不明) [3 : 110]、P.3985 (年代不明) [4 : 9]。[ ]内は各資料の[巻 : 頁]。
- 2 六十總布、金總布は解釈に苦しむ語である。議論をやや先取りしつつ、敢えて説明を試みるならば、六十總布とは後代の『天工開物』乃服第二巻 経数の項の「綾紬経計五千六千縷。古書八十縷為一升、今綾絹厚者、古所謂六十升布也。」という記述に鑑み、

細かな糸を多数使用して織り上げた、布でありながら絹に近い織物、金縷布は字義通りには金色の経糸を使ったものと推定ができるだけである。

- 3 『儀礼』喪服に「冠六升。[注] 布、八十縷為升」とあり、この鄭注の時点で糸80本を1升とするという概念があったことが確認できる。
- 4 「升」の音は [siəng] であり [Karlgren: 897a]、これのみが他とは異なる。
- 5 文書等で織幅の規格がしばしば言及される絹布に比べ、棉布の織幅は具体的記述が見当たらず検討の必要な問題である。筆者も論を準備しつつあるが、ここではさしあたって上述の寺幡Aの織幅50cmに従った。これは織幅として最小を示す同じく出土寺幡の48cmの例と、当時の中国本土の織幅の規格1尺8寸 $\approx$ 54cmのほぼ中間値にあたる。
- 6 前述のとおり通常規格とは異なる織幅の存在も視野に入れるべきであり、また利用したデータについても実見調査による再確認が必須である。このような不完全要素は承知しつつも、今回は棉布全体の傾向を把握することを敢えて優先したことをお断りしておきたい。
- 7 例えば『大典統録』（1492年成）「公私行用綿布、升数則五升長則三十五尺広則七寸以上」が紹介される [須川1993: 40]。
- 8 [維漢大詞典: 258] の 'tamaq' には「耙、耙子」ならびに「(艾特萊斯織機控制経綫的) 軸棍」の説明が掲載されている。
- 9 織機は和田地区洛浦県吉亜郷の織物工房、農具は和田市内のチョン・バザールの農具店にて確認(2008年2月)。ただし訪問時期の関係で織機については実物を見ることはできず、筆者の持参した図版を見ながらの織工の女性からの聞き取りにより情報収集した。

## On *Yiti/säkiz tištäki böz* (Seven/eight-teeth Cotton Cloth) in Old Uighur Documents

Chiharu TASAKI

'*Yiti/säkiz tištäki böz* (seven/eight-teeth cotton cloth)' is a term found in Old Uighur documents which were brought mainly from Turfan and Dunhuang 敦煌, dated to the West Uighur Kingdom period (9<sup>th</sup> - 14<sup>th</sup> centuries). During the period cotton cloth functioned as currency in the region and *yiti/säkiz tištäki böz* is considered to have been the same. To clarify its actual state will contribute to a better understanding of the society and economy of the West Uighur Kingdom and its surrounding areas including Dunhuang.

In this short paper, some Chinese terms in Dunhuang manuscripts (ex. *ba-zong-bu* 八綜布), which are said to closely correspond to the Uighur term in question, are reexamined in the new light of other historical records in order to find what kind of cloth it really was. The published data on the archaeological cotton materials excavated from this region are also analyzed to make a survey of the quality of cotton cloth in general and to compare it with that of *yiti/säkiz tištäki böz*.

As a result it is concluded that; (1) since the Chinese word *zong* 綜 has the same meaning as *sheng* 升, a skein of warps composed of 80 threads, the adjective words of the cotton cloth in question explains how many warps were used to weave that cloth. (2) *yiti/säkiz tištäki böz* can be regarded as the cotton cloth of the most average quality, when considered with respect to thread count. (3) judging from the information on traditional handlooms in Central Asia, it is possible to form the hypothesis that the Uighur term '*tištäki*' is derived from the name of a loom's part which operates on skeins of warps.

(278 words)